



Title	ギデンズのセクシュアリティ論：社会理論の再ジェンダー化という視点から
Author(s)	時安, 邦治
Citation	年報人間科学. 1999, 20-1, p. 79-95
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12233
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ギデンズのセクシュアリティ論 (I)

—— 社会理論の再ジェンダー化という視点から ——

〈要旨〉

本稿はギデンズのセクシュアリティ論を「社会理論の再ジェンダー化」という視点から読む試みである。本稿では、まずギデンズの「反省能力（再帰性）」という鍵概念について検討する。それから、ギデンズのフーコー批判の論点を整理し、ギデンズの理論の特徴を明らかにしたい。

ギデンズの『親密性の変容』によれば、反省能力の高まりは、一方で性の知識の社会への浸透を促し、生殖から自律した「柔軟なセクシュアリティ」の可能性を切り開いていく。それは他方で、人間関係に「親密性の変容」を生じさせる。カップルの関係は、従来のロマンティック・ラブを理想とする異性愛関係から、「溶け合う愛」による「純粋な付き合い」へと変わっていく。純粋な付き合いはパートナー同士の対等な関係であり、その意味で民主的な関係である。このような民主的な関係の可能性をフーコーは見落していると言つ。

ギデンズのセクシュアリティ論には、反省能力を通じてジェンダー関係を民主化する戦略が読み取れる。反省能力がどう作用して、どう社会が変

容していくかは常に不確定性をもつという意味では、ギデンズの戦略がうまくゆく保証はないが、私は彼の意図をイデオロギー批判として評価したいと思う。

キーワード

ギデンズ、セクシュアリティ、ジェンダー、モダニティ、再帰性

時安 邦治

本稿はアンソニー・ギデンズのセクシュアリティ論を読む試みである。現代を代表するこの博識な社会理論家は、従来の社会学の成果を総合しつつ、モダニティとハイ・モダニティについて独創的な研究を次々と発表している。しかし、残念ながら日本では、彼のモダニティ論が詳細に論じられることは少ない。彼のモダニティ論の中で重要な位置を占めているセクシュアリティ論にしても、その刺激的な内容にもかかわらず、これまで議論として取り上げられることはほとんどなかった。

なぜ彼のセクシュアリティ論がさほど注目を集めないのかについては、確固としたことが言えない。ただ、一つ想像される理由として、社会理論の領域におけるこれまでのセクシュアリティ論が、数少ない特定の視点から研究されてきたということが指摘できるだろう。代表的なものとして、フロイト主義の精神分析に依拠しつつ展開された性欲研究や、セクシュアリティの言説と身体へ作用する権力との協働を批判するポスト構造主義的研究などがあげられるだろう。ギデンズのセクシュアリティ論は、これらの観点のいずれから距離を取り、セクシュアリティをモダニティの生活環境に生じたさまざまな変容と関連づけながら、それらが結びついた大きな変容の一部として論じようとする。

そこで、発想を逆転させれば、ギデンズのセクシュアリティ論の検討することによってギデンズのモダニティ論を——その全体像とは言わないまでも——理解することも可能なのではないか。そのような関心から、私は本稿において、ギデンズのセクシュアリティ論

を通じて彼のモダニティ論を素描したい。同時に、彼のセクシュアリティ論をジェンダー的観点からのモダニティ論の再解釈、再提示だと捉え、そこに批判的社会理論の可能性を読み取りたいと思う。

一．社会理論の再ジェンダー化

これまでの社会理論が描いてきた社会的存在としての「人間」は、多くの場合、性別を抽象された人間であった。しかし、社会の現実を目を向ければ、社会には「男性／女性」の区別が厳然として存在し、社会はそのようなジェンダーの区別ないしは差別を前提とする秩序によって構築されている。にもかかわらず、そのようなジェンダー関与的な社会秩序の中で立ち上がる社会理論は、その社会秩序を覆い隠すかのように、ジェンダーについて中立的なものとなっている。もちろんこの「中立性」は「見かけ」である。ジェンダー化されたものの脱ジェンダー化された表象——そこに潜む問題性をギデンズが見逃すことはなかった。そこで、彼が追究してきたモダニティの分析にジェンダーの観点を取り入れるという構想が生まれたのであろう。私はこのギデンズの構想を「社会理論の再ジェンダー化 (re-gendering of a social theory)」という用語で捉えたい。『親密性の変容』⁽²⁾は、ギデンズ自身によるジェンダー的観点からのギデンズ理論の書き直しの試みであり、理論の再ジェンダー化によって現在のジェンダー関係を顕わに描き出し、再帰的に影響を及ぼすうとする政治的挑戦である。

では、なぜギデنزズはジェンダーそれ自体よりもセクシュアリティを分析対象に選んだのか。私がここで「社会理論の再ジェンダー化」と呼んでいるプロセスは、社会についての脱ジェンダー化された理論を、ジェンダーの観点を組み込みつつ脱構築することを意味している。したがって、社会理論の再ジェンダー化にとっては、理論が直接ジェンダーを研究対象とすることを必要としない。むしろ、理論を再ジェンダー化する者は、ジェンダー以外の対象を分析することを通じて、反省的に理論に内在するジェンダー性を捉え直そうとするのである。

ギデنزズのセクシュアリティ論をそのような試みとして位置づけた上で、本稿ではこの後、ギデنزズがセクシュアリティをモダニティの特性とどのように結びつけながら論じているかを確認し、彼の分析を参考にしながら、現在の男性異性愛者のセクシュアリティがどのような問題を抱え込むことになっているかについて見ていきたい。

二. モダニティの反省能力

セクシュアリティはギデنزズのモダニティ論の応用問題として位置づけられると言つてよいだろう。ギデنزズによれば、モダニティ（あるいはハイ・モダニティ）とは、「制度的反省能力（institutional reflexivity）」^③が社会的事象に徹底して働くようになることともに、社会的事象のグローバル化が進み、伝統の妥当性が揺らいでいる時

代の社会生活および社会環境のあり方に対して与えられた名前である。セクシュアリティの問題圏は、制度的反省能力が作用している様子を最もわかりやすく見て取れる領域の一つである。まずは、ギデنزズの反省能力（reflexivity）の概念について、少し詳しく見ておこう。

ギデنزズは現代社会を「ポスト伝統社会（post-traditional society）」と見ている。伝統とは「行為の反省的モニタリングを共同体の時間—空間組織に組み込んでいく様式」である。それは「時間と空間を操作する手段であり、個々の活動や経験を過去、現在、未来という連続性の中に挿入していく。そして逆に、過去、現在、未来は規則的な社会的実践によつて構造化されていく。」^④現代社会に限らず、どの文化においても、生活は絶えず新たな発見によつて手直しされていく。いわゆる「伝統社会」であっても、伝統は新しい世代に伝えられるたびに再解釈・再構成が必要になる以上、決して変化を伴わないはずはない。けれども、伝統的文化では、変化を変化として意味づけるような独立した時間的・空間的標識がほとんどないまま、伝統は再解釈され、明確化されながら、日常の習慣的行為に影響を与えていた。それに対し、反省能力が高まって徹底的に働くようになったモダニティにおいては、知識は反省的に獲得されるようになる。伝統はもはやそれ自体の権威によつては通用しなくなり、伝統であること以外の妥当性をもつ知識によつて、いわば外側から正当化されることが必要となる。

「社会的実践が、まさにその実践に関して生じてくる情報に照ら

して絶えず吟味、修正されて、その結果、その実践の特性を本質的に変えていくという事実」^⑤。こそ、ギデンズがモダニティの反省能力に関して最も重視する事実である。それは思考と行為との継続的な相互参照と相互変容の過程である。モダニティにおいて人々が暮らす環境は、反省的に適用された知識によって形成されながら、同時にそうした知識それ自体も常に修正されていく可能性を含んでいる。

ギデンズは、たとえば『キンゼイ・レポート』に代表されるような、セクシュアリティの実態調査を例としてあげている。『キンゼイ・レポート』は、セクシュアリティという社会の特定の領域（の諸事象）についての調査・分析を目的としていた。しかし、そのレポートが公表されると、その内容が新たな論争を巻き起こし、新たな調査が再び行われ、その結果が再度論争を巻き起こしていくという連鎖が生じることとなった。また、他方で、公共圏で行われるこうした論争は一般の人々の生活に根付き、人々の性生活を変えていく働きもした。しかも、それがまといっている科学であるという權威が、ひよつとすると不道德かもしれない性行為についての人々の道徳的不安を拭い去る役割をも果たしたと言えるだろう。そして、何より重要なことに、こうした調査研究の増加は、日常の性生活における人々の反省能力が加速的に増大していく事態の表現であるとともに、その推進力としても機能したのである^⑥。

また別の例で言えば、今日の先進国においては、多かれ少なかれ離婚率が高い。政府などが発表する統計によって、一般の人々はそ

の事実をすでに知っている。そして、このことが意味するのは、結婚しようと考えている人々が家族制度や男女関係、性道徳などに生じたいくつかの変化をすでに何らかの形で認識しているということである。結婚を考え直す人もいるだろうし、離婚後の生活を考える仕事をやめないでおこうとする女性も出てくるだろう。離婚率の認識は彼ら・彼女らの結婚生活に影響を及ぼし、今度は彼ら・彼女らの婚姻関係における行為のあり方が再び社会へと参照して、社会全体として婚姻関係のあり方が変化していくことになる。

ギデンズは、このようなモダニティの反省能力を、制度的反省能力と呼ぶ。それは現代的な環境での社会活動を構成していく基本要素である点で「制度的」である。またそれは、社会生活を記述するために導入された用語が、個人や集団の行為の枠組みとして繰り返して社会生活に入り込み、それを変容させるという意味で「反省的」である^⑦。

とりわけ社会科学の知は制度的反省能力と分かち難く結びついている。社会科学の知は人々の生活の中に教育やメディアなどを通じて絶えず浸透していくため、社会科学の知が対象とする人々は、すでに社会科学的に物事を考えることを学んできている。そのため、社会科学の知は、対象の反省能力を引き出しながら対象を再構築していくことになる。人々は社会科学の知を受け入れ、それに拠って自らの生活を調整していく。こうして、社会科学の知は、それが普及するにしたがつて、社会と人々の生活を変容させていく。

十九世紀から二十世紀初頭にかけて発達したセクソロジーの言説

は、まさしくモダニティの制度的反省能力によって、社会生活に浸透し、それを変容させていった。そのようなセクシュアリティの科学の展開を応用問題として、ギデンズは自分の理論の有効性と可能性を示そうとする。

三、フーコー批判

ミシェル・フーコーは、十九世紀以来のセクソロジーを含む問題を最も鋭敏な形で批判しようとした思想家である。セクシュアリティが社会理論の最も重要なテーマの一つであることを明らかにしたフーコーの理論は、彼以後の多くのセクシュアリティ研究者に広く受容されていく。けれども、ギデンズはフーコーに対して批判的に距離を取るうとする。ここでは、ギデンズのフーコーへの批判を確認しておきたい。フーコーへの批判の中から出てくる論点こそが、ギデンズのセクシュアリティ論を際立たせる要素となるからである。フーコーの議論では、この一世紀の間に生じたセクシュアリティの領域での変化をうまく説明できないと、ギデンズは考えている。ギデンズの指摘するフーコーの問題点は、おおよそ次の四点に集約される。(一) フーコーはセクシュアリティを強調しすぎていて、ジェンダーを犠牲にしている。(二) セクシュアリティの本質に関するフーコーの議論はほとんど言説——しかもどちらかと言えば特定の形の言説——のレベルにとどまっている。(三) ロマンティック・ラブは家族における変化と密接に結びついている現象であるにもかかわらず、

ならず、フーコーはセクシュアリティとロマンティック・ラブとの結びつきについて何も語っていない。(四) フーコーの、モダニティと関連した自己の概念は疑いを差し挟まねばならない⁽⁸⁾。

第一の点については、また後ほど触れることにしたい。先に第二の、フーコーの議論が特定の形の言説にとどまっているという批判点について見ておきたい。フーコーの考えに従えば、ビクトリア朝時代にはセクシュアリティが「秘め事」であつたといつても、さまざまな文献や医学情報が公開されたため、公然の秘密となつていった、ということになる。しかし、ギデンズによれば、一般の人々に入手可能な情報源に性が幅広く記述されたり、分析、研究されていったと想定するのは誤りである。当時、医学雑誌などはごく少数の人々しか利用できなかったし、そもそも識字能力さえない人々が多かった。セクシュアリティを一部の専門家の議論にだけ閉じ込めることは事実上の「検閲」であり、教育を受けた層をも含めて大部分の人々は、セクシュアリティについての文献を手にすることができなかった。しかも、このような検閲は男性よりも女性に強く影響を及ぼしたのである。実際当時の女性ほとんど性の知識をもたずに結婚を向かえていた。けれども現代では、性規範のダブル・スタンダード等の障害はあるにせよ、すでに女性は性に関する知識も手に入れ、ある程度自由にセックスを楽しむことができるようになっていく。この変化はフーコーの単純な枠組みでは説明できない。そこで、性についての言説の働きを過度に強調する立場を離れて、フーコーの分析がほとんど目を向けていない要因を見ていく必要がある

とギデンズは言う。それは第三の批判点へと結びつく。

第三の批判点は、フーコーがセクシュアリティとロマンティック・ラブとの関連に目を向けなかったということである。この批判は、ギデンズが「純粹な付き合い (pure relationship)」⁹⁾ ならびに「柔軟なセクシュアリティ (plastic sexuality)」と呼ぶものと本質的に関わっている。ロマンティック・ラブという考えは、当初は中産階級を中心に、その後はほとんどの階層へと広がっていった。ロマンティック・ラブという理想の普及によって、婚姻は経済以外の動機に基づくものとなり、夫婦の絆は親族関係から切り離され、新しい意味合いをもつようになった。「家庭 (home)」が労働とは別の独自の生活環境として出現し、職場の道具的性格と対照的に、少なくとも原理的には個々人が情緒的な支えを期待できる場となっていた。このことは、後に論じる「純粹な付き合い」が婚姻に浸透していることの表れである。

ロマンティック・ラブによって生じた家族の情緒的紐帯を重視する傾向は、子だくさんを推奨する圧力をおさえ、家族規模を縮小する方向へ進んでいった。こうして、大多数の女性にとって、セクシュアリティを妊娠と出産の反復から切り離すことが初めて可能になった。また、家族規模の縮小は、歴史的には、有効な避妊法が開発、導入されたことと深く関わっている。現代的な避妊法は生殖のコントロールを可能にした。セックスが生殖から分化していく過程の中からセクシュアリティは生じた。妊娠を抑制するとともに、人工的に受胎させることが可能となった時点で、セクシュアリティはほぼ

完全に自律性を獲得する。進んだ生殖技術によって生殖が自然の支配から脱して人為的なコントロールの下に入ることをギデンズは「生殖の社会化 (the socialisation of reproduction)」と呼ぶ。生殖の社会化によって、生殖、親族関係ならびに世代との結びつきを断った「柔軟なセクシュアリティ」が成立する。

柔軟なセクシュアリティは、ここ何十年かの間に生じた「性革命」の前提条件でもあった。この性革命は、ただジェンダーの区別なく性に対する寛容な態度——いわゆるフリーセックス——を広めていくというだけのことではない。性革命には二つの基本要素が含まれている。一つは女性の性的自律性の革命であり、もう一つは男女にかかわらず同性愛の隆盛である。

セクシュアリティを理解する知が生み出され、その知が社会生活に浸透し、社会生活を再構築していくという点では、性に関する言説がその描写する社会的現実の構成要素となっていくとするフーコーの主張を、ギデンズは認めている。けれども、ギデンズは、フーコーがそのような過程を、権力としての知が社会生活へと一方的に侵入していく現象と捉えたことを批判する。「我々は、その現象が権力と結びついていることを否定することなく、その現象をむしろ「制度的反省能力」の一つとして、しかも常に変化していくものとして捉えるべきである」とギデンズは言う¹⁰⁾。

第四の、フーコーの自己概念に対する批判点について。ギデンズは、現代社会における自己 (self) の発達についてのフーコーの解釈に疑問を呈し、自己を特定の「テクノロジー」が構成するものと見な

すことに反対する。現代社会においては自己アイデンティティがかなり不確実になっている。「今日の自己は誰にとっても反省的なプロジェクトであつて、過去、現在、未来についての多かれ少なかれ継続的な審問である。自己」とは、セラピーやあらゆる種類の自助マニュアル、テレビ番組、雑誌記事などのおびただしい量の反省材料の中で継続されるプロジェクトなのである。」¹¹ また、自己と並んで身体も今や反省能力が浸透した領域である。¹² 自己にせよ、身体にせよ、生活スタイルをある特定の形式へと形作るうとする権力が一方的に侵入していく領域ではない。そのどちらもが、モダニティの不確実な社会状況の中で、反省的に獲得されていくのである。

以上見てきたように、ギデンズはフーコーのセクシュアリティ論を否定することを目指しているわけではない。むしろギデンズは、フーコーの描き出したモダニティの暗い面を乗り越えていくために、フーコーの理論を批判的に摂取しながら、個人の自律をよりいっそう促進するような政治と理論の可能性を目指しているのである。その可能性を秘めているのが「純粋な付き合い」である。

四. 純粋な付き合いと溶け合う愛

「純粋な付き合い (Pure relationship)」とは、関係それ自体のために、さらには、相手との持続的な結びつきからそれぞれの人が引き出しうるもののために、ある社会関係が結ばれる状況のことである。そして、純粋な付き合いが維持されるのは、その中にいる個人それ

ぞれにとつて十分に満足のいくものが与えられると両者が考える場合に限られる。」¹³ 伝統的な「近しい人格的結びつき (close personal bond)」と対照的に、純粋な付き合いは社会的または経済的な生活という外的な条件によつてつなぎ止められることはない。たとえば、かつて結婚は契約であり、当人同士よりもむしろ親や親戚が経済を考慮して取り結ぶものであった。家庭内分業が夫婦を物質的につないでいた。現代でもそういう面はもちろんあるが、それでも概してかつて存在したような、婚姻関係の維持を外側から支える要素は消えつつあり、結婚は他人との近しい付き合いから引き出される感情的満足を提供するがゆえに取り結ばれるものとなった。

どんな人格的關係であれ、それを維持するためには相応の努力が必要であるが、関係それ自体のためだけに存続する関係においては、パートナー間で都合が悪くなったことはすべて、本質的に関係それ自体を脅かすものとなる。したがって、関係に依存しない外的な相互性によつてつなぎ止められない純粋な付き合いでは、「波風たてずにやっていく」のは非常に困難なことである。そこで、本来的に不安定な関係である純粋な付き合いにおいて、中心的な役割を果たすのは「自己投入 (commitment)」である。自己投入は、かつて近しい人格的結びつきがもっていた外的アンカーに代わつて、純粋な関係性をつなぎとめる働きをする。けれども、外的なアンカーをもたない純粋な付き合いは、いつの時点であれ、その一方が自分の思うままに関係を終わらせることができる。純粋な付き合いは常に「とりあえず」続いていくものである。それゆえ、純粋な付き合いにお

いては、関係が常に不確実なものである点を認識しながらも、なお危険を冒してその関係を保ち続けようと自己投入していく必要がある。そうして、自己投入の度合いが高まれば高まるだけ、関係が解消したときの精神的な打撃も大きくなるというリスクが常につきまとうことになる。

純粹な付き合いが生じてきたことは、親密性が包括的に再構築されていく過程の一部である。もちろん、純粹な付き合いは異性愛以外の文脈でも生じている。友情は純粹な付き合いである。同性愛者は異性愛者に先んじて、純粹な付き合いに生きる実験をしてきた。純粹な付き合いは、柔軟なセクシュアリティの発達と平行して、それと因果関係を保ちながら生じてきたのである。

純粹な付き合いの発生と対応して、愛情のあり方に關しては、ロマンティック・ラブに代わって「溶け合う愛 (confluent love)」が生じてくる。ロマンティック・ラブにおいては、将来パートナーとなる者同士が心を惹かれ合い、強く結ばれるようになる。それを支える決定的な要素は「情熱的な愛 (amour passion)」である。情熱的な愛は相手への自己投影的な同一化をもたらし、それによってカップルは強い一体感を感じることができる。この一体感は、既成の男性性と女性性の差異によって強化される。ロマンティック・ラブをうまくいかせるのは、「男」らしい男と「女」らしい女との組み合わせである。その意味で、ロマンティック・ラブは、表面的には平等主義的な関係であるように見えながら、実はジェンダーの不均衡を内包している。ロマンティック・ラブという夢は、現実には多くの場

合、女性の家庭生活への隷属と結びついていた。

それに対し、溶け合う愛は情緒的なギブ・アンド・テイクの対等な関係を前提とする。関係が対等になればなるほど、愛は純粹な付き合いに近づいていく。この場合、親密性が育つ度合いに応じて愛も育っていく。それゆえ、どれだけ相手に対して心配事や要求を素直に打ち明け、自分をさらけ出すことができるかが、溶け合う愛が成立する鍵になるのである。また、溶け合う愛はモノガミイ的な関係を前提としない。純粹な付き合いは、関係それ自体からくる利益をお互いがとりあえず認め合うことによつてのみ成立する。パートナー以外と性的関係をもたないという性的排他性は、パートナー間で望ましいことと考えられなければならない。そして、ロマンティック・ラブが異性愛に特徴的であるのに対し、溶け合う愛は異性愛に固有のものではない。溶け合う愛は必ずしもアンドロジナス的ではなく、やはり差異を中心に構築されている。とはいえ、溶け合う愛は純粹な付き合いをモデルとして想定している。それゆえ、溶け合う愛においては、付き合いの一部としてセクシュアリティについての交渉が続けていかなければならない。このような溶け合う愛は、カップルとしての純粹な付き合いが成立するための条件でもあり、その結果でもある。

五. 男性性の困難——一つの問題として

パートナー間の関係が、近しい個人的なつながりから純粹な付き

合いへと移行し、溶け合う愛が愛情の中心形態になっていくこと——それがギデンズの言う「親密性の変容」の核心である。純粹な付き合いはパートナー同士の対等な関係であり、その意味で民主的な関係である。親密性が変容していくにつれて、男性は男性性特有の問題を抱え込むことになる。ギデンズは見ている。もちろんギデンズは女性のセクシュアリティについても論じているが、ここでは私の関心にしたがって、男性性の困難だけを取り上げることにはしない。

チョドロウの理論¹⁴にしたがう形で、ギデンズは次のように議論する。母親が子育てを中心的に行うことが定着している現代の我々の社会は、乳幼児に対して誰よりも母親が強い影響力をもつ社会となっている。この社会で、男性はまさしく男性として育てられるために、幼児期に最愛の存在である母親との同一化から切り離される。そのため男性においては、生きるために必要な安心感の源泉である「基本的信頼(basic trust)」¹⁵——それは乳幼児期に自分の世話をしてくれる人物との間に築かれるものである——が損なわれてしまっている。ペニスの想像上の表象である男根(ファロス)は、男性にとっても女性にとっても反抗心や自由の象徴となるが、男根はそれ自身の意味を女性の支配という幻想から引き出してきた。現代では、母親の愛情を喪失するために、男性のセクシュアリティは男根が有する権力を維持しようとして、ますます性器セクシュアリティに集中していく。親密性の変容が進みつつある現在、その変容に対応できない男性、男根による女性の支配という幻想にとらわれたままの男性は、さまざまな問題を抱え込まざるをえなくなる。

従来も、男性は女性に感情的に依存してきた。しかし、ジェンダーが不平等に区別されていた時期には、その感情的依存はさまざまな道具立てによって隠蔽されてきた。その道具立てとは、(一)男性が公的領域を支配すること、(二)性道德のダブル・スタンダード、(三)結婚に値する純潔な女性と(売春婦や妾といった)結婚に値しない汚れた女性を区別すること、(四)性差を神や自然、生物学的真理によるものと理解すること、(五)女性を愚かで非合理的存在とみなして問題視すること、(六)性別役割分業、の6つである¹⁶。反省能力の高まりと親密性の変容とともに、これらが崩壊していったとき、男性のセクシュアリティは衝動強迫的なものとなる。女性が溶け合う愛を求めるようになり、これまで隠蔽されてきた男性の感情的依存への共犯を拒否し始めると、男性のセクシュアリティはますます衝動強迫的になっていく。男根という誇張されたペニスの表象がその意味を剥奪され、男根がただのペニスに戻るまで、男性のセクシュアリティは、一方で暴力を含めた性的支配と、他方で性的能力についての絶え間ない不安との板挟みになり続ける。

男性性の困難の具体的な例を見てみよう。たとえばギデンズによれば、異性愛のボルノグラフィは、現実の社会では男性の感情的依存に対する女性の共犯関係がもはやほとんど失われているにもかかわらず、女性の共犯関係を繰り返し明示している。ボルノグラフィにおいては、女性は男性を刺激し興奮させるように様式化されて描かれる。よくある筋立ては、男性が性的快楽を得ているというのではなく、女性が男根によって性的快楽を得、最後にはオーガズム

に達するというものである。こういう筋立ては、女性の性的快楽について理解しようというものではなく、むしろ女性の性的快楽を飼いや慣らそうとする意図に貫かれている。また、男性の女性に対する性暴力は、家父長制支配の存続ではなく、むしろ男性の不安感や無力感に起因するものとしてギデンズは解釈する。暴力は女性の共犯関係からの撤退に対する破壊的反応なのである。

六、性の解放

純粹な付き合いと溶け合う愛は、ギデンズにおいては、ラディカルな民主主義へとつながっていくものと考えられている。では、純粹な付き合いと溶け合う愛はラディカルな民主主義とどのようにつながっているのか。そのことを考える上で、ひとまず、先ほど取り上げたギデンズのフーコー批判の第一点目について、ここで改めて論じたい。それは、セクシュアリティを重視するフーコーの理論にはジェンダーの観点が取り入れられていないという批判である。

ギデンズはフーコーを次のように理解している。フーコーは西欧社会のセックスへの没頭を出发点とし、いわゆる「抑圧仮説」に疑問を投げかけていった。「セクシュアリティ」という概念の創造も含めて、セクシュアリティへの関心は、権力を生み出す手段としての監視が広まった結果である。このような権力は、まずは身体に、その後には生殖などを含めた生物学的過程に、集中していく。権力は人々の生をある特定の形へと発展させていく。身体the life of

the body)と種the life of the speciesの生が交差する領域であるセックスは、大いに人々の関心を集めていくことになる。こういう理由で、人々はセクシュアリティにただならぬ関心を示し、事細かに追求していくのである。権力がセクシュアリティとして展開していくことによって、セックスは人々にとって何か望ましいものとなり、そのために我々は、主体性を確立するためにセックスと熱心に関わる破目になった。

このようにフーコーの権力論をまとめた上で、ギデンズはフーコーが権力と呼ぶものが実は不平等にジェンダー化された権力であったと言う。権力はジェンダーにかかわらず人間すべてを同じ程度で抑圧したわけではない。まさしくその権力によって、女性はモダニティの中核領域から排除され、性的快楽を享受する可能性を否定されたのである。我々がセクシュアリティに魅了されていることを認めるとしても、そのことを、セクシュアリティが抑圧的な権力として社会に隈なく浸透している事態として解釈することにギデンズは異議を唱える。モダニティの発展とともに監視がより強化され、それだけ抑圧的な権力が強まっていくのであれば、それに応じて我々のセクシュアリティはもつと歪められた、画一的なものになるはずである。しかし、我々は、とりわけ女性たちは、まだまだ決して満足のできる形ではないにせよ、長年にわたる闘争の結果として、以前よりもはるかに自由なセクシュアリティを獲得したことは否定できないであろう。ジェンダーによる排除の圧迫の下で、女性たちは着々と社会的基盤の変革を企ててきたのである。「セクシュアリティ

イは「権力」によって創り出されたものでもないし、また、セクシュアリティが浸透していくことは……そのような「権力」にとつてセクシュアリティが中心的な重要性をもっていたことの結果ではない」¹⁷とギデنزと言う。セクシュアリティが権力システムの拡大によって再構築されてきた点については、ギデنزズはフーコーの見解に同意する。国家を含めて、現代の社会組織はどのようなローカルな活動にも浸透してきているからである。しかしそれと同時に、モダニティの制度的反省能力のおかげで、社会の特定の領域を実質的に変容させていくような、個人的、集合的な積極的政治参加の可能性も開けてきているのである。

ギデنزズがフーコー批判を展開する理論戦略から、柔軟なセクシュアリティに抑圧からの解放の潜勢力を見い出そうとする彼の意図を、我々は読み取ることができる。セクシュアリティは、生殖の社会化によって、生殖と結びついてきた諸々の倫理から自律して、柔軟なセクシュアリティとなる。柔軟なセクシュアリティは個々人の特性（所有物（property））となり、自己アイデンティティの一部をなすようになる。そして、柔軟なセクシュアリティは、純粋な付き合いに基づいた他者との関係を築くための手段の一つとなる。理念的には、純粋な付き合いに基づくパートナーは、溶け合う愛に自己投入して、互いのセクシュアリティについて交渉を重ね、認め合う。そのようにして成立する関係は、相互の信頼と誠実なコミュニケーションに基づきわめて民主的な人間関係のほずである。

七. 生の政治

モダニティの社会環境の中で、自己はさまざまなオブションの中から反省的に選び取られ、一つの物語（narrative）として形作られねばならないものとなっている。ギデنزズはそのことを「自己の反省的プロジェクト（the reflexive project of self）」と呼ぶ。セクシュアリティは、とりわけジェンダーとの関連において、個人的なものの政治（the politics of the personal）を生じさせてきた。ギデنزズはそれを自己の反省的プロジェクトへと引きつけて、「生の政治（the politics）」と表現する。それは別の言い方をすればライフスタイルの政治であり、ライフスタイルの決定を「再道德化する（remoralise）」ことを意味している。

モダニティに特徴的なのは、個人の人生にとって重要な意味をもつさまざまな経験が個人の日常生活から隔離され、社会化されてしまっていることである。我々はもはや日常的に人が生まれたり死んだりするのを見ることはほとんどなくなった。セックスはきわめて個人的な時空間においてのみ行われる行為となっている。ピーター・ウインチが「限界観念（limiting notions）」¹⁸と呼んだものが関わる経験、特に誕生、死、性などは、自然や絶対者といった社会の外に存在するものとの関連によって意味を理解され、その意味が倫理と道德の枠組みを支えていた。しかし、現代社会ではそのような経験が日常生活から隔離された結果、我々の倫理または道德はある

意味で宙に浮いた形になっていると言える。しかし、人間は「いかに生きるか」という問いかけから逃れられない以上、我々は宙に浮いた倫理や道徳を再び価値づけて、自らの生活スタイルを選び取ることが必要である。自分はいかに生きるか、そして、自分の生き方をどのような倫理または道徳によって意味づけるか。モダニティの社会生活においては、ますますそれらが政治的な争点となってくるのである。

セクシュアリティは自己アイデンティティの一部をなしている。それゆえ、現代では、セクシュアリティをめぐる自己理解、つまり性的アイデンティティの問題は、「いかに生きるか」という問いかけと結びついた倫理的な問題となっている。しかも、それだけではない。セクシュアリティは、親密性の変容のために、「パートナーとしての他者とともにいかに生きるか」という問いかけをも引き出す。つまり、セクシュアリティをめぐる問題は、自己アイデンティティに関わる問題であると同時に、他者関係に関わる問題であり、その意味で二重の倫理性をもつ問題であると言える。

八．結びとして

セクシュアリティについての社会理論を再ジェンダー化することによって何が得られたであろうか。権力は決して誰に対しても平等に抑圧を加えてきたわけではなく、常により多くの抑圧を被ってきたのは男性ではなく女性であった。とはいえ、女性はその抑圧に対

する闘争の結果として、以前よりもはるかに自由な性と生の可能性を切り開いてきた。現代では、純粋な付き合いと溶け合う愛によって特徴づけられるようなパートナー関係が生まれつつある。それはきわめて民主的な関係になる可能性を蔵している。しかし、男性の感情的依存を受け入れるのを拒否し、純粋な付き合いを求めるようになっていく女性に対して、男性はその拒否によってますますセクシュアリティが衝動強迫性を増していく。親密性の変容によってもたらされた民主的な関係の可能性とは裏腹に、男性のセクシュアリティは大きな困難にぶつかってしまっている。さらに、すでに異性愛関係が性愛関係の唯一の形態ではなくなっているということもある。性愛関係が純粋な付き合いになるということとは、これまで異性愛関係が特別扱いされてきた最大の理由がもはや通用しなくなるということを意味する。セクシュアリティが生殖から自律するということは、セクシュアリティそれ自体には生殖がまったく重要性をもたないということだからである。これらの点において、現在、異性愛関係は岐路に立たされていると言える。異性愛者が自らのジェンダーとセクシュアリティを反省的に問い直すことをしなければ、異性愛関係は問題含みの危うい関係とならざるをえない。

『親密性の変容』においては、ギデンスはいくつかのセラピーのマニユアルを取り上げながら、自律 (autonomy) の重要性を説くだけである。だが、そこには確かに、反省能力が高まれば、男性は男根につきまとう不条理なイメージを反省的に捉え、自分たちで誇張された男性性を解体して、自律的に純粋な付き合いに自己投入でき

るようになるかもしれないという可能性が示唆されている。もちろん、それがいつ実現するのかははっきりしない。また、そもそもギデンズも認めている通り、モダニティの反省能力がどのように作用して、どのような結果を生むのかを計るのはきわめて困難な作業であるとするれば、反省能力が作用する限り、社会はなかなか思惑通りに動かないと言うこともできる。ギデンズには、彼の研究成果を公表することによって、モダニティの反省能力を通じて、ジェンダーの平等化、ジェンダー関係の民主化をよりいっそう推進する意図があるにちがいない。私はその意図を積極的に評価したいと思う。

重要なのは社会理論を読み直し、書き直すことである。権力論としてのセクシュアリティ論を再ジェンダー化することがなければ、性と生の抑圧構造の全体像も、さらには抑圧を乗り越えていく解放の可能性も見えてはこないであろう。社会理論の再ジェンダー化は、社会理論の批判的解釈学の必須部分である。社会理論の批判的解釈学とはイデオロギー批判の一形態である。ハーバースマスによれば、近代の合理化過程が進行し、真理、規範の正当性、主観的誠実さといった諸々の妥当性のカテゴリーが分化することによって、ようやくイデオロギー批判が可能となる。ハーバースマスはイデオロギー批判について、次のように言う。「批判がイデオロギー批判になるのは、理論の妥当性が成立の連関から十分に切り離されていないこと、理論の背後に承認できない権力と妥当性の混同が隠されていること、そして、この理論はその混同のおかげで評判を得ていることを、批判が示そうとするときである。イデオロギー批判が示そうとするの

は、意味の連関と事柄の連関のきっちりした区別が構成されるような水準にありながら、どのようにしてこの内的諸関係と外的諸関係の混乱が生じるのかということ——そして、そうした混乱が生じるのは、妥当性請求が権力関係によって決定されているためだということである。」¹⁹ イデオロギー批判は、理論への批判が反省能力を通じて社会の編成を変容させることを目指す、モダニティに特有の解釈学的営為である。

ジェンダーとセクシュアリティの領域では、従来このイデオロギー批判は「フェミニズム批評」が代表的であった。もちろん社会理論を再ジェンダー化する解釈学は「フェミニズム」である必要はない。女性であることに立脚したフェミニズムのパスpekティヴが成立するのと同じ意味で、被抑圧者としての男性という立場からのパスpekティヴ²⁰、同性愛者としてのアイデンティティの確立を目指すパスpekティヴ²¹、トランスジェンダー（トランスセクシユアリティ）の人々のパスpekティヴなど、複数の多様なパスpekティヴがありうる。異性愛男性というパスpekティヴも当然ながら可能であろう。これらすべてのパスpekティヴが社会理論の再ジェンダー化に有効であり、不可欠でもある。

社会理論の再ジェンダー化は社会理論を解釈することによって性と生を意味づける政治である。自らの性と生の充実した意味を求めて、現状の実定的な表象と意味づけの編成を読み換えようとする抵抗である。本稿で取り上げたモダニティにおける男性異性愛者の困難という問題にしても、近年ようやく立てられ始めたばかりの問題

であり、いまだまったく出口が見えない。しかしながら、その出口は、一つ一つ社会理論を再ジェンダー化していく営為の果てに見えるものであるにちがいない。

注

- (1) 本稿は、一九九八年一〇月一八日に社会思想史学会 第三回大会（埼玉大学）において口頭で発表した自由論題報告を論文化したものである。報告の原題は「モダニティとセクシュアリティー—アンソニー・ギデンズのセクシュアリティ論—であった。
- (2) Giddens (1992).
- (3) reflexivityに対する訳語としては「再帰性」が比較的良好に用いられ、他に「反省性」「反照性」などの語も使われているようである。「再帰性」という訳語は、個人の外部に生じる社会的な事象に関する表現としてはまだしも、個人の内面の事柄を表す用語としては適当でない。何よりも、その用語が意味するところが直感的に理解できない。「反照性」も同じ理由からここでは使用しない。「反省性」では、ギデンズが意図しているようなモダニティの力動的な側面がうまく言い表せないと思われる。そこで、本稿では reflexivity に対しておおよそ「反省能力」という訳語をあてている。ギデンズの reflexivity に対する訳語については中西（一九九八）を参照。
- (4) Giddens (1990), p. 37.
- (5) Ibid., p. 38.
- (6) たとえば、オーラル・セックスや同性愛を具体例として考えてみ

ればよい。また、セックスの「初体験」の年齢がますます低下していることも、この説明で理解できる。

- (7) Giddens (1992), pp. 28-29.
- (8) Ibid., p. 24. 以下では議論の都合上、もともとギデンズが示した順序を入れ換えてある。
- (9) relationship は通常「関係性」と訳されている。ここでは、relationship が日常語として使われている点を強調していることをふまえ、訳語にも日常語として使われている「付き合い」を使用している。実際には「関係」という訳語が最も相応しいように思われるが、それでは relation との区別が失われてしまうので採用しなかった。
- (10) Ibid., p. 28.
- (11) Ibid., p. 30.
- (12) 人々が熟を上げているダイエットやフィットネスなどを例に考えればよい。人々は自分がイメージする自己の身体を獲得しようとして努力している。このことは単に権力の一方的な侵入と捉えるだけでは説明がつかないだろう。人々は自分の思い描いた自己イメージに身体を近づけようと、積極的にダイエットやフィットネスに取り組んでいると言えるからである。身体に権力が働いていないと言うことは決してできないが、権力だけですべての説明がつかうわけではない。
- (13) Ibid., p. 58.
- (14) Cf. Chodorow (1978).
- (15) ギデンズのこの用語は E. H. エリクソンからの借用である。
- (16) Giddens (1992), p. 111.
- (17) Ibid., p. 173.
- (18) Cf. Winch (1972).

(61) Habermas (1985), pp. 140-141.

(20) 近年「男性学 (men's studies)」や「メンズ・リブ (men's liberation)」という言葉が登場し、いくつかの男性解放団体が発足している。

(21) 代表的なものとしては、動くゲイとレスビアンの会 (通称アカー) が取り組んでいるゲイ・スタディーズがある。

《参考文献・参考文献》

Chodorow, Nancy, *The Reproduction of Mothering: Psychoanalysis and the Sociology of Gender*, University of California Press, Berkeley, 1978.

Erikson, Erik H., *Identity: Youth and Crisis*, W. W. Norton & Company, New York, 1968.

Foucault, Michel, *An Introduction: The History of Sexuality*, Vol. 1, Vintage Books, New York, 1990.

——— *The Use of Pleasure: The History of Sexuality*, Vol. 2, Vintage Books, New York, 1990.

——— *The Care of the Self: The History of Sexuality*, Vol. 3, Vintage Books, New York, 1988.

Giddens, Anthony, *The Consequences of Modernity*, Stanford University Press, Stanford, 1990.

——— *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Stanford University Press, Stanford, 1991.

——— *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love & Eroticism in Modern Societies*, Stanford University Press, Stanford, 1992.

Habermas, Jürgen, *Theorie des kommunikativen Handelns, Band 1*, Suhrkamp, Frankfurt am Main, 1981.

——— *Theorie des kommunikativen Handelns, Band 2*, Suhrkamp, Frankfurt am Main, 1981.

——— *Der philosophische Diskurs der Moderne: Zwölf Vorlesungen*, Suhrkamp, Frankfurt am Main, 1985. (本稿ではTSW版を利用した。Suhrkamp-Taschenbuch Wissenschaft, 1991.)

Kinsey, Alfred C., et al., *Sexual Behaviour in the Human Male*, Saunders, 1948.

——— *Sexual Behaviour in the Human Female*, Saunders, 1953.

Winch, Peter, *Understanding a Primitive Society, in Ethics and Action*, Routledge & Kegan Paul, 1972.

ウィンチ、ピーター、『倫理と行為』、奥雅博・松本洋之訳、勁草書房、一九八七年。

ウィンセント、キース・風間孝・河口和也、『ゲイ・スタディーズ』、青土社、一九九七年。

エリクソン、E. H.、『アイデンティティ——青年と危機』、岩瀬庸理訳、金沢文庫、一九七三年。一九八二年に改訂版。

風間孝・ウィンセント、キース・河口和也編、『実践するセクシュアリティ——同性愛／異性愛の政治学』、動くゲイとレスビアンの会、一九九八年。

ギデンズ、アンソニー、『近代とはいかなる時代か?——モダニティの帰結』、松尾精文・小幡正敏訳、而立書房、一九九三年。

———『親密性の変容——近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム』、松尾精文・松川昭子訳、而立書房、一九九五年。

チャンドロウ、ナンシー、『母親の再生産——性差別の心理・社会的基盤』、大塚光子・大内管子訳、新曜社、一九八一年。

中西真知子、『再帰性と近代社会——ギデンズの再帰性概念の徹底化を論じ

る、『ソシオロジ』、第四三卷一号（通卷一二三号）、社会学研究会、一九九八年。

ハーバーマス、ユルゲン、『コミュニケーション的行為の理論（上）』、河上倫逸・Zフーブリヒト・平井俊彦訳、未来社、一九八五年。

——『コミュニケーション的行為の理論（中）』、岩倉正博・藤沢賢一郎・徳永恂・平野嘉彦・山口節郎訳、未来社、一九八六年。

——『コミュニケーション的行為の理論（下）』、丸山高司・丸山徳次・厚東洋輔・森田数美・馬場宇瑳江・脇圭平訳、未来社、一九八七年。

——『近代の哲学的デイスクルスⅠ』、三島憲一・轡田収・木前利秋・大貫敦子訳、一九九〇年。

——『近代の哲学的デイスクルスⅡ』、三島憲一・轡田収・木前利秋・大貫敦子訳、一九九〇年。

フーコー、ミシェル、『性の歴史Ⅰ 知への意志』、渡辺守章訳、新潮社、一九八六年。

——『性の歴史Ⅱ 快楽の活用』、田村俤訳、新潮社、一九八六年。

——『性の歴史Ⅲ 自己への配慮』、田村俤訳、新潮社、一九八七年。

Giddens' Theory of Sexuality: From the Viewpoint of Re-engendering of a Social Theory

Kuniharu TOKIYASU

This essay analyzes Giddens' theory of sexuality from the viewpoint of re-engendering of a social theory. First, I examine his key concept of 'reflexivity'. Next, I sort out the points of his criticism toward Foucault and then make clear the features of Giddens' theory.

According to Giddens' book, *The Transformation of Intimacy*, reflexivity in modern settings promotes the penetration of knowledge of sexuality into a society and makes possible what Giddens calls 'plastic sexuality', which is independent of reproduction. On the other hand, it gives rise to 'the transformation of intimacy' in the arena of human relations. 'Pure relationships' and 'confluent love' have taken the place of traditional heterosexual relations and romantic love. Pure relationships are democratic in the sense that they are based on the equality between partners. Giddens says that Foucault failed to notice the possibility of arising democratic relationships.

From Giddens' theory of sexuality we can interpret his theoretical strategy of democratizing gender relations through modern institutional reflexivity. We are not sure whether the strategy will be successful, because we cannot anticipate precisely how reflexivity will work in a society and how the society will change or transform. Even so, I evaluate this work of his as an ideology criticism.

Key Words

Giddens, sexuality, gender, modernity, reflexivity.